

Title	レオ・シュトラウスの科学技術論
Author(s)	松尾, 哲也
Citation	年次学術大会講演要旨集, 23: 260-263
Issue Date	2008-10-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/7549
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

レオ・シュトラウスの科学技術論

○松尾哲也（九州大学）

古代ギリシャから現代に至るまで、人間の知的営為は自然界と人間社会の現象の解明に取り組み、発展を遂げてきた。物理学などの自然科学の発展は、人間の技術力を増大させ、技術力の増大は人間の生活をより便利に、また物質的により豊かにしてきた。しかしその反面、その技術力は戦争と結びつくことによって人間生活をその根底から脅かし続けてきたのも事実である。

第一次世界大戦では、当時の最新の技術が戦争に利用され、戦車、そして毒ガスが実戦で使用された。第一次世界大戦は史上初めての総力戦となり、戦場で戦う兵士だけでなく、女性も含めた本国の労働者が総力をあげて兵器の生産などを行い、国家の技術力、生産力が戦争遂行のために総動員された。

第二次世界大戦では第一次世界大戦以上の甚大な被害を人間社会は被った。なかでも第二次大戦末期に登場した原子爆弾の破壊力は絶大であり、広島・長崎に投下された原子爆弾は、数十万もの人命を奪い、そこに住む人々の生活基盤をことごとく破壊した。第二次大戦後、各国は原子爆弾の保有に覇を競い合い、そして東西冷戦時代には、核戦争の恐怖が世界を覆った。現代科学が生み出した技術力は、人間理性の制御を離れて、紛争の解決といった政治的な目的のために利用されると、人類の生存さえ脅かすものになってしまう。

「近代人は盲目の巨人である」と指摘したのは 20 世紀の政治哲学者レオ・シュトラウス（Leo Strauss, 1899-1973）である。シュトラウスによれば、近代人はそれ以前の人間と比べると巨人であるが、その力の増大に比べて知恵や善性は増していない。科学は確かに人間の力を増大させたが、その力の正しい使用について責任ある仕方で何も教えることはできないとシュトラウスは指摘する¹。シュトラウスにとって、その背景にあるのは、実証主義に基づく次のような見解、すなわち諸価値に関する科学的な、それゆえ合理的な知識は存在せず、科学ないし理性は善い目的と悪しき目的とを区別することはできないとする見解²、そして一般に科学者には価値判断は許されないという見解である³。

シュトラウスからすれば、諸価値に対する合理的な知識の否定は、やがて科学そのものの存在価値を崩壊させる。つまり諸価値に関する合理的な知識が存在しないこと、また科学者には価値判断は許されないとする主張が台頭することによって、そもそも科学そのものは善であるか否か、また科学が善であるとすれば、それはどのような意味において善であるのか、そうした科学の存在価値に向けられた問いに対して科学そのものが答えることができない⁴。人間が生存するために、また善く生きるために、科学は必要であるという合理的価値判断を科学自身が明確に示すことができなくなったのである⁵。

さらにシュトラウスは、水爆兵器の時代において、人類の生存と科学との積極的な関係は、元来それが有していた明らかな明証性をすべて喪失したと指摘する。科学は、人類の生存さえ脅かしかねない核兵器を生み出し、それによって科学そのものが善であるという明証性そのものが失われてしまった⁶。

こうした科学の危機に際して、シュトラウスは、人間の知的営為の端緒というべき古代ギリシャの哲学および哲学者の学問的姿勢にまで遡り、人間の知的営為の意義とそれが担う責任について議論を展開する。

シュトラウスによると、哲学を人間の生や善・悪の事柄に関する探究へと向かわせた最初の人物がソクラテスであった⁷。ソクラテスの人間的な事柄に関する研究は、人間的な事柄に関して「何であるか」という問いを提起すること、たとえば、「勇気とは何か」、「都市とは何か」といった問いを提起することであった。ただソクラテスの研究は、勇気といった何か特定の人間的事柄に関して「何であるか」という問いを提起することに限定されず、人間的な事柄とは何かといった根本的な問いをも提起するものであった⁸。

人間的な事柄に特有の性質を把握するためには、人間的な事柄と人間的ではない事柄、すなわち神聖な事柄（宗教的な事柄）や自然的事柄との間にある本質的な違いを把握しなければならず、人間的な事柄に関する研究は、神聖な事柄（宗教的な事柄）や自然的事柄に関する理解を前提とする。それゆえソクラテスの人間的な事柄に関する研究は、「あらゆる事柄」に関する包括的な研究に基づいていた。ソクラテスの人間的な事柄に関する研究への転回、神聖な事柄（宗教的な事柄）や自然的事柄の無視に基づくものではなく、あらゆる事柄の理解に向けた新しい研究方向に基づくものであったことをシュトラウスは明らかにしている⁹。

そしてソクラテスは、「何であるか」という事物の研究の根本となる問いを提起する際、我々にとってまず在るもの、最初に目に見えてくるもの、つまり現象から出発した。ただ最初に目に見えてくるものは、我々がそれらの事物を見ていることのうちに存するのではなく、それらの事物について言われていること、すなわちそれらの事物に関する意見のうちに存する。それゆえソクラテスは、事物の本性を理解する際、事物の本性に関するさまざまな意見から出発した。こうしたソクラテスの変革をシュトラウスは、「常識」、もしくは「常識の世界」への転回として表現されうるものであると指摘している¹⁰。

シュトラウスによると、ソクラテスにとって事物の本性に関する多様な意見を無視することは、我々が有する事実へと接近する最も重要な方法、あるいは我々が到達できる範囲にある真理の最も重要な痕跡を放棄することであった¹¹。事物の本性についてより矛盾のない、つまりより真理に近い知識に到達するには、多様な意見から出発しなければならない¹²。ソクラテスにとって多様な意見の存在は、真理の探究を促す動因であり、事物の本性に関する意見にそれぞれ矛盾がみられるという事実こそがより矛盾のない見解に到達しようとする哲学的営為を生み出したのである。

このようにソクラテスにとって意見は真理の断片であり、多様な意見の存在こそが、哲学的探求の出発点であった。そしてこのことが、哲学にある責任を負わせることになる。

シュトラウスによると古典古代において、意見の領域とはまさに政治的領域であった。意見を出発点とする哲学は、自らの行為を反省し始めるやいなや、その意見の領域たる政治的領域が哲学的関心の的にならざるをえない。さらに哲学がそれ自身の目的と本性を十分理解するためには、その本質的な出発点である政治的領域を理解しなければならず、また政治的なものの本性を理解しなければならない¹³。そして哲学がその出発点である意見の領域、すなわち政治的領域を出発点とし、やがて政治的なものを哲学的考察の対象として設定することが、なぜ哲学なのか、そしてなぜ人間の生活に哲学が必要なのか、という問いに答える責任を哲学者に課することになる。

シュトラウスによると、「なぜ人間の生活に哲学が必要なのか」という問いに関して、人間の生活は共に生きることであり、より正確に言えば政治的な生活であるから、「なぜ哲学なのか」という問いは、「なぜ政治的な生活に哲学が必要なのか」ということを意味する。そして哲学者は政治的共同体の法廷の前でその問いに答えなければならない¹⁴。なぜなら哲学の意味は決して一般的に理解されておらず、また哲学は多くの善意の市民たちによって信頼されることなく、嫌われていたからである¹⁵。そうしたなかで、「なぜ政治的な生活に哲学が必要なのか」という問いは、哲学を政治的に責任あるものとし、哲学者が政治的生活を無視してしまうことを禁じる¹⁶。

哲学者は自らが生き残るためには、必然的に哲学を政治的共同体の法廷の前で正当化しなければならない。哲学を政治的共同体に対して正当化するためには、哲学が政治的共同体の安寧に貢献することをアピールする必要がある。シュトラウスによると、プラトンの『国家』は、他の古典古代の哲学者の著作と同様に、政治的共同体の安寧が決定的に哲学の研究に依存していることを示すことによって、哲学を政治的に正当化しようとする試みとしての性格をもっていた¹⁷。

ただ哲学者は、哲学を政治的に正当化するためだけに、政治的共同体ないし政治的領域の安寧に貢献しようとしていたわけではない。すでに指摘したように、意見は真理の断片としての性質をもっていた。そして意見の領域とは政治的領域であった。それゆえ政治的領域は、哲学的探究にとって欠くことのできない学問的基盤であり、意見の領域たる政治的領域こそが哲学的探究にとって学問的出発点だったのである。

哲学は意見の領域を基盤としている以上、意見の領域が崩壊すれば、哲学的探求も成立しない。哲学は、政治哲学として必然的に意見の領域たる政治的領域を善き方向に導く責任を負っている。まさに古典的政治哲学の主要な関心とその存在意義は、政治的生活を記述したり、理解したりすることではなく、政治的生活を正しく導くことにあった。そしてそれゆえにこそ古典的政治哲学は価値判断によって導かれていたのである¹⁸。このように意見から出発して知識へと到達する学問的方法を生み出したソクラテスにとって、人々が共に生活する領域つまり政治的領域こそが哲学という学問の基盤になっていたのである。

以上のように古代ギリシャにおいて、意見の領域こそが哲学という学問的探究の基盤であり、それゆえにこそ哲学は、政治哲学として価値判断に導かれ、意見の領域たる政治的領域を善き方向に導く責任を負っていた。

またソクラテスの人間的な事柄に関する研究は、神聖な事柄（宗教的な事柄）や自然的な事柄を無視したものではなく、あらゆる事柄の理解に向けた新しい研究方向に基づくものであった。つまり人間的な事柄に関する研究は、自然的事象に対する研究や神学的な研究も含めた包括的な研究に依拠していた

のである。

ところがシュトラウスによると、17世紀以降、数世代を経るうちにニュートン物理学のような新しい科学が成功にすることに従って、哲学と科学との間に大きな区別が生じた。つまり、「科学」とは近代の哲学ないし科学の成功した部分であり、「哲学」とは成功しなかった部分となった。こうして、科学は、哲学よりも高い地位をもつようになり、その結果として、科学的ではないすべての知識は軽視されるようになる。そして科学こそが、世界に関する人間の自然的理解の完成態とみなされるようになったのである¹⁹。

しかし、その後、19世紀に非ユークリッド幾何学の発見と物理学におけるその応用などが起こることにより、科学は、世界に関する人間の自然的理解の完成態とみなすことはできず、むしろ世界に関する人間の自然的理解の根本的な修正であるということが明らかになった²⁰。つまり、それまでの世界の科学的理解というものは、自然的理解の完成態ではなく、その根本的修正を経て生まれるものであることが明らかになったのである²¹。こうした事態に関連して、シュトラウスは、フッサールの科学的理解の方向性について次のように述べている。

「フッサールは誰よりも深く次のことを理解していた。つまり世界の科学的理解は、我々の自然的理解の完成態では決してなく、我々をして科学的理解の基盤そのものを忘却させるようなやり方で、世界の自然的理解から派生してきたものである。したがってあらゆる哲学的な理解は、世界に関する我々の常識的な理解から、すなわちあらゆる理論化に先行して感覚的に把握される我々の世界理解から出発しなければならない」²²。

シュトラウスが意見から出発するソクラテスの哲学に目をむけるのは、シュトラウス自身もあらゆる哲学的理解は、世界に関する我々の常識的な理解から出発しなければならないと考えていたからである。つまり、哲学的な探求は、多様な意見によってとりまかれた常識の世界、我々が実際に生活している生活世界から出発しなければならない。

こうした学問的姿勢に依拠するシュトラウスにとって政治哲学とは、「政治的なものの本性に関する意見を政治的なものの本性に関する知識によって置き換えようとする試み」であり、意見を科学的出発点としている²³。シュトラウスにおいても意見は、知識へと向かう方向性を指し示している²⁴。ただシュトラウスにとって、意見だけが知識に先行して存在しているわけではない。

シュトラウスは、政治的なものの本性を理解しようとする試みについて考えるには、まず政治的な知識を保持していなければならないと主張する。分別ある大人ならば、ある程度の政治的知識を保持しており、誰もが税、警察、法、刑務所、戦争、平和、休戦について何かを知っている。さらに誰もが、戦争の目的は勝利であること、戦争は最大の犠牲と他の多くの損失を要すること、また勇氣は賞賛に値し、臆病は非難に値することを知っている。普通の人々がもつ政治的知識は、長く政治的経験を積んだ人々がもつ政治的知識と比べると確かに乏しいけれども、普通の人も常識としてある程度の政治的知識を保持している²⁵。

シュトラウスにとって、意見や常識といった前科学的知識こそが、あらゆる科学研究に先行する考察や反省にとって重要な意味をもっている。戦争は最大の犠牲と多くの損失を要するといった常識的価値判断は、戦争遂行の効率的な手段・技術を探究する科学的考察への反省を促し、また科学が意見や常識といった前科学的知識を出発点としているという事実認識が、意見や常識によって取り巻かれた生活世界に対する科学の責任を自覚させる。

古代ギリシャの哲学者の学問的基盤が意見の領域にあったように、シュトラウスにとって意見と常識によって取り巻かれている生活世界こそが学問の基盤である。そしてそれゆえにこそ、学問は生活世界を善き方向に導く責任を負っている。こうした学問の存在意義に関するシュトラウスの議論は、現代科学が改めてその存在意義を問い直す際の起点となるべきものである。

-
- ¹ Leo Strauss, *The Rebirth of Classical Political Rationalism —An Introduction to the Thought of Leo Strauss* — (Chicago, London : The University of Chicago Press, 1989), p. 32, 239. 以下、本書を *RCPR* と略記する。邦訳は、石崎嘉彦監訳『古典的政治的合理主義の再生——レオ・シュトラウス思想入門』（ナカニシヤ出版、1996 年）76、307 頁。なお訳文は邦訳から適宜変更している。以下同じ。
- ² Leo Strauss, *Liberalism Ancient and Modern* (Chicago, London : The University of Chicago Press, 1968) , p. 22. 以下本書を *LAM* と略記する。邦訳は、石崎嘉彦他訳『リベラリズム 古代と近代』（ナカニシヤ出版、2006 年）34-35 頁。
- ³ *RCPR*, pp. 32. 邦訳 76 頁。
- ⁴ *Ibid.* , pp. 32-33. 邦訳 76 頁。
- ⁵ *Cf. RCPR*, pp. 23. 邦訳 66 頁。
- ⁶ *Ibid.* , pp. 22-23. 邦訳 65 頁。
- ⁷ Leo Strauss, *Natural Right and History* (Chicago, London : The University of Chicago Press, 1953), p. 120. 以下 *NRH* と略記する。邦訳は、塚崎智・石崎嘉彦訳『自然権と歴史』（昭和堂、1988 年）133 頁。
- ⁸ *NRH*, pp. 121-122. 邦訳 135 頁。
- ⁹ *Ibid.*
- ¹⁰ *Ibid.* , pp. 123-124. 邦訳 137 頁。
- ¹¹ *Ibid.* , p. 124. 邦訳 137 頁。
- ¹² *Ibid.* , pp. 124-125. 邦訳同上。
- ¹³ *RCPR*, p. 61. 邦訳 108 頁。
- ¹⁴ *Ibid.* 邦訳同上。
- ¹⁵ *Ibid.* 邦訳同上。
- ¹⁶ *Ibid.* 邦訳同上。
- ¹⁷ *Ibid.* 邦訳同上。
- ¹⁸ *Ibid.* , pp. 57-58. 邦訳 104 頁。
- ¹⁹ *Ibid.* , p. 240. 邦訳 309 頁。
- ²⁰ *Ibid.* , pp. 240-241. 邦訳 309 頁。
- ²¹ *NRH*, p. 79. 邦訳 89 頁。
- ²² Leo Strauss, *Studies in Platonic Political Philosophy* (Chicago, London : The University of Chicago Press, 1983), p. 31.
- ²³ Leo Strauss, *What is Political Philosophy and Other Studies* (Chicago, London: The University of Chicago Press, 1988), pp. 11-12. 邦訳 7 頁。
- ²⁴ *Ibid.* , p. 10. 邦訳 4-5 頁。
- ²⁵ *Ibid.* , p. 14. 邦訳 11-12 頁。